古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 228 号（2021 年 11 月）

現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について

吉池孝一

1. 満洲語口語諸説

満洲語の破裂音と破擦音が、どのような二項（無声と有声、有気と無気、硬音と軟音など）によって区別されるかということについて幾つかの説をみると次のようである。破裂音と破擦音を、t と d で代表させる。

①服部四郎・山本謙吾(1956)	/t/	（強音。[t‘]～[t]）	―	/d/（弱音。[d̥]～[d]）
②清格爾泰(1982)	t‘	（無声有気音）	―	d̥ （半有声の無気音）
③趙傑(1989)	t‘	（無声有気音）	―	t （無声無気音）
④愛新覚羅烏拉熙春(1992)	t‘	（強子音。有気音）	―	t（弱子音。無気音）

次いで各説の概略を確認する。

2. 服部四郎・山本謙吾(1956)

①の服部四郎・山本謙吾(1956)は、新疆ウイグル自治区伊犂地方の錫伯族（シボ族あるいはシベ族。18 世紀中ごろ満洲より移住しこの地の防備にあたった満洲人の後裔）出身者に対する調査である。

破裂音と破擦音を/p//t//k//q//c/と、/b//d//g//ɢ//j/とし、前者を閉鎖が強い強音（tense）、後者を閉鎖が緩い弱音（lax）とする。強音は無声有気音[t‘]であるが、音の環境により無声無気音[t]となる。弱音は半有声音[d̥]であるが、音の環境により完全な有声音[d]となるとする。

ここで言う「半有声音[d̥]」とは何か。服部四郎(1984)『音声学』によると、半有声音については、「持続部の後半または前半のみが有声の音」であり「英語の単独で発音された[ðiːz]these の[ð]は後半が有声，[z]は前半が有声である．蒙古語（ホロンバイル）の呼気段落の頭における[b][d][g]も前半が無声になる傾きがある．」（114 頁）とする。[d̥]については、「鼻音・側面音・ふるえ音・弾き音・弱摩擦音・母音などは普通，有声であるから，それらの無声化音に対する特別の記号がなく，無声化は[̥]（ただし，下へ出た字には[°]をつける）によって表わす．たとえば，[m̥][ŋ̥][l̥][r̥][ʀ̥][ɹ̥][i̥][ḁ][u̥]などはそれぞれ無声の[m][ŋ][l][r][ʀ][ɹ][i][a][u]のことである。（……省略……。ただし，[b̥][d̥][g̥]は[p][t][k]と異る．人によって半有声音や不完全有声音あるいは（ε2）のものをこう呼ぶことにしよう）を表わすために有声音の記号に[̥]をつけることがある。たとえば[b̥][z̥]．」（128 頁）【二カ所の下線は吉池による。下線部は衍文であろう。（ε2）は Jespersen 氏の非字母的記号】とある。

3. 清格爾泰(1982)

②の清格爾泰(1982)は、1961 年から中国の黒龍江省富裕県の三家子屯で行われた調査である。三家子屯（嫩江沿岸）の満洲人は吉林省長白山一帯（現在の吉林省と朝鮮民主主義人民共和国の境界一帯）に居た満洲人の後裔で、康熙初年に現在の富裕県に駐屯し防衛に当たったという。調査資料は 1982 年に公表された。

破裂音と破擦音を p，t，k，q，tʂ，tɕ と、b，d，g，ɢ，dʐ，dʑ とし、「満洲語口語子音図」（「満語口語輔音圖」242 頁）において、前者を有気音（「送気」）に配し、後者を無気音（「不送気」）に配する。欄外の注記をみると、「b，d，g，(ɢ)が表す実際の音価は b̥，d̥，g̊，q̥ であり、p，t，k，q が表す実際の音価は p‘，t‘，k‘，q‘である。dʐ，tʂ，dʑ，tɕ 等の音の音価についても推して知ることができよう。」[①]とする。「b̥，d̥，g̊，q̥」の音質について特段の説明はないが、「[b]は両唇の無気無声の破裂音である。本来は b̥ あるいは p と表記すべきであるが、表記上の便宜により、ここでは b で表記する」[②]とあるので、b̥ 等は無声無気音の p 等に準ずるものであろうが、b̥ 等と p 等の違いについて明確な説明はない。同氏の現代モンゴル語の記述の中に参考となるものがあるので次に提示する。清格爾泰(1963)に「b̥ 音は、両唇破裂音。無声の子音であるが、他の外国語の無声の p と比較すると噪音は一層小さい。この音を発する時、声帯は、閉鎖段階が緩む際にすき間ができるが、声は出さず、閉鎖が破裂すると同時に、声帯は緊張し、声を出す状態となる。」[③]とある。「噪音は一層小さい」とは閉鎖と破裂が緩やかな弱音（lax）の音質と解することができる。「閉鎖が破裂すると同時に、声帯は緊張し、声を出す状態となる」とは後半が有声となると解して良いのであろう。そうであるならば、満洲語についての清格爾泰(1982)の b̥，d̥，g̊，q̥ の[̥]も同様の働きを示す音声記号とみて大過はないであろう。

清格爾泰氏は、服部四郎・山本謙吾氏と同様に b̥，d̥，g̊，q̥ などを認めるが、無声有気音の t‘の系列の子音を有気音とし、b̥，d̥，g̊，q̥ の系列の子音を無気音として、気音の有無による対立とするところは、服部四郎・山本謙吾氏と異なる。

4. 趙傑(1989)

③の趙傑(1989)は、黒龍江省泰来県大興（嫩江沿岸）で行なわれた調査である。大興の満洲族は康熙年間に長白山および寧古塔から移住した旗人であるという[④]。

破裂音と破擦音を無声有気音の p‘，t‘，k‘(母音 ɑ の前で q‘)，tʂ‘，tɕ‘，ts‘と、無声無

---

① 「b、d、g、(ɢ)代表的実際音値為 b̥、d̥、g̊、q̥；p、t、k、q 代表的実際音値為 p‘、t‘、k‘、q‘；dʐ、tʂ、dʑ、tɕ 等音的音値類推。」242 頁。

② 「[b]双唇不送氣清塞音。本應以 b̥ 或 p 来表示，但是爲了記音上的方便，我們在這里以 b 来表示。」237 頁。

③ 「b̥ 音：双唇、塞音。它是清輔音，但是比起其他外語的清音 p 来噪音成分更小些。發這个音時，声帯在閉塞階段松弛有縫隙，不發出声音，閉塞破裂的同時，声帯緊張，処于發出声音的状態。」693 頁。

④ 趙傑(1989)の 4 頁参照。

気音の p, t, k(母音 ɑ の前で q), tʂ, tɕ, ts の対立とする。破裂音と破擦音の声の有無や強弱には言及しないが、挙例をみると、k の異音として、語中および語末に有声摩擦音の ɣ（ɑ 以外の母音の前）と ʁ（ɑ の前）が出現する。挙例は、kəɣə（姉)、xəɣə（女性)、ɑʁɑɣə（雨が降った)、piʁɑn（野原)。あるいはこれは、無声無気音の k の閉鎖が緩く直後の破裂が弱いため、母音に挟まれて有声摩擦音に変化したと理解することができる例であるかもしれない。そのように理解して良いならば弱音（lax）の性質を持っているということになる。

5. 愛新覚羅烏拉熙春(1992)

④の愛新覚羅烏拉熙春(1992)は、黒龍江省の黒龍江沿岸の方言と嫩江沿岸の方言を 5 地点調査したものである[⑤]。黒龍江方言の代表は孫呉県の四季屯（黒龍江沿岸）であり嫩江方言の代表は富裕県の三家子屯（嫩江沿岸）であるとするから[⑥]、明示はされないが、当該書の調査資料はこの二地点を反映していると見なしてさしつかえない。

破裂音と破擦音について、p‘, t‘, k‘, tʂ‘, tʃ‘と p, t, k, tʂ, tʃ を二項の対立子音として挙げ、前者を“強子音”後者を“弱子音”とよび、強子音を有気音、弱子音を無気音とする[⑦]。強子音と弱子音が何を指すか明示されないが、無声無気音 p は、有声子音或いは母音

---

⑤ 黒龍江方言（黒龍江沿岸の方言）の調査地点として孫呉県四季屯、愛琿県大五家子郷、遜克県松樹溝郷興隆村の三地点を挙げる。嫩江方言（嫩江沿岸の方言）の調査地点として富裕県三家子屯、泰来県依布斉村の二地点を挙げる。

⑥ 愛新覚羅烏拉熙春(1992)の 3-8 頁による。

⑦ 「現代満洲語の子音の系列において、子音は有気の子音と無気の子音の二対の対立する音韻に分けられる。有気であるか無気であるかは音韻を区別する主要な標識となるが、無声であるか有声であるかにはそれほど普遍性はない。とりわけ多くの場合、有声子音はしばしば無声化する。

有気の子音はいずれも強子音であり、これらの音を発する時、口腔に発出する気流は全般的な妨げを受け、気流が、妨げている発音器官を突破する時、強い噪音が生じる。発音方法の異なりにより有気の子音を、(1) 有気の破裂音、(2) 有気の破擦音、(3) 有気の摩擦音の三種に分ける。有気の破裂音と有気の破擦音は、いずれも、無気の無声破裂音や無声破擦音と対立する音韻を構成し、有気の摩擦音は有声の摩擦音と対立する音韻を構成する。無気の子音は、破裂音、破擦音、有声摩擦音のほかに、有声の側面音、鼻音、ふるえ音、半子音をふくむ。……省略……。全ての無気の子音は弱子音である」【下線は吉池】。以下に 41 頁の原文を示す。

1、在現代滿洲語的輔音系統中，輔音應該分為送氣輔音和不送氣輔音兩套對立的音位。因送氣或不送氣，往往是区別一個音位的首要標誌；而清或濁，却没有那麽普遍性的界線，特別是許多場合濁輔音還常常清化。

送氣輔音都是強輔音，在發這些音的時候，口腔中呼出的氣流受到全面的阻碍，當氣流冲破形成阻碍的發音器官時，就産生強烈的噪音。根据發音方法的不同，送氣輔音又分為三類：(1) 送氣塞音、(2) 送氣塞擦音、(3) 送氣擦音。送氣塞音和送氣塞擦音都是和不送氣的清塞音、清塞擦音構成對立音位，而送氣擦音則是和濁擦音構成對立音位。不送氣輔音除包括塞音、塞擦音和濁擦音以外，還包括濁的辺音、鼻音、顫音和半輔音（即無擦通音)。……省略……。所有的不送氣輔音都是弱輔音。

＋p＋u、という音の環境で有声摩擦音のβとなる。挙例は、umßume（埋める）、izaßume（集める）など[⑧]。あるいはこれは、無声無気音のｐの閉鎖が緩く直後の破裂が弱いため、母音に挟まれて有声摩擦音に変化したと理解することができる例であるかもしれない。そのように理解して良いならば弱音（lax）の性質を持っているということになる。愛新覚羅烏拉熙春氏が使用する強子音（「強輔音」）と弱子音（「弱輔音」）には、①服部四郎・山本謙吾(1956)の強音（tense）と弱音（lax）に通底するものが想定されていると理解して良いのであろう。もっとも、破裂音と破擦音の区別を気音の有無に求めており、無声無気音が有声性を伴なうというような言及はない。この点は①と異なる。

6. 諸方言の関係

愛新覚羅烏拉熙春(1992)の 2 頁は、現代満洲語の口語には四種あるとする。すなわち「京旗満洲語」(北京の知識人に代々受け継がれた満洲語。すでに人数が少なく方言を形成し得ない)、「黒龍江満洲語」(黒龍江沿岸地域の満洲語)、「嫩江満洲語」(嫩江沿岸地域の満洲語)、「伊犁満洲語」(新彊伊犁地方の錫伯族の満洲語）である。

①服部四郎・山本謙吾(1956)は、新彊ウイグル自治区伊犁地方の錫伯族（18 世紀中ごろ満洲より移住しこの地の防備にあたった満洲人の後裔）であるから「伊犁満洲語」。②清格爾泰(1982)は、黒龍江省富裕県三家子屯(嫩江沿岸)であるから「嫩江満洲語」。③趙傑(1989)は、黒龍江省泰来県大興（嫩江沿岸）であるから「嫩江満洲語」。④愛新覚羅烏拉熙春(1992)の黒龍江省孫呉県四季屯（黒龍江沿岸）は、「黒龍江満洲語」。同じく④愛新覚羅烏拉熙春(1992)の黒龍江省富裕県の三家子屯（嫩江沿岸）は、「嫩江満洲語」となる。愛新覚羅烏拉熙春氏（2 頁）は、黒龍江省の黒龍江沿岸と嫩江沿岸の満洲語はともに、清の康熙初年に黒

現代滿洲語中有 27 個輔音音位，即：

塞音：	pʻ p tʻ t kʻ k ʔ
塞擦音：	tʂʻ tʂ tʃʻ tʃ
鼻音：	m n ŋ
辺音：	l
顫音：	r
擦音：	f v s z ʂ ʐ ʃ x ɣ
半輔音：	w j

なお、上記の文について、かつて吉池が提示した理解を訂正する。

かつて吉池孝一(2018)において、愛新覚羅烏拉熙春(1992)の冒頭の段落にある「子音は有気の子音と無気の子音の二対の対立する音韻に分けられる。有気であるか無気であるは音韻を区別する主要な標識となるが、無声であるか有声であるかにはそれほど普遍性はない。とりわけ多くの場合、有声子音はしばしば無声化する。」という記述により、無気音である“弱子音”のｐｔｋ tʂ tʃが、音質として有声性を有すると解したが、それは誤解である。声の有無による対立がある子音は、摩擦音のｆとｖ、ｓとｚ、ʂとʐであり、それに関わる記述であろう。無気音のｐ ｔ ｋ tʂ tʃに音質として有声性を認める記述は、いずれの箇所にも無いので、吉池孝一(2018)の理解は、誤解である。この場を借りて訂正する。

[⑧] 愛新覚羅烏拉熙春(1992)の 48 頁による。

龍江一帯の防備に当たらせた寧古塔（現在の黒龍江省の南東、牡丹江中流あたりに位置する）と吉林一帯の満洲人の後裔であり、その言語は比較的近く、主要な相違は音にあるという。

①②③④は方言が異なり、調査者も異なっており、いずれも調査者の聴覚に頼った記述であるから、無気音が半有声であるか否かなどの微妙な判定には調査者の個人差も出るので単純に比較することはできないが、概略として、破裂音と破擦音における子音の対立の見方は次のとおりである。①は音韻として対立を強音（tense）と弱音（lax）に求め、音声として無声有気音、無声無気音、有声無気音を認める。③から④は子音の対立を気音の有無に求める。なお②は無気音の系列に有声性を認める表記を用いる。①と、②③④の子音の対立の扱いが異なるため、つぎに①が強音（tense）と弱音（lax）の対立とした事情を用例に沿って確認する。

7. 服部四郎・山本謙吾(1956)の強音（tense）と弱音（lax）

服部四郎・山本謙吾(1956)は、新彊ウイグル自治区伊犂地方の錫伯族出身の話者に対する調査である。破裂音と破擦音の音韻表記として、/p//t//k//q//c/と/b//d//g//ɢ//j/を挙げ、前者を強音（tense）とし後者を弱音（lax）とする。

強音は閉鎖と呼気が強く、そのため破裂の騒音が強いことを特徴とする。ふつう無声の有気音となる。強音/p/を含む単語の音声表記は次のとおり。

「綿入れの長い上衣」[p‘amp‘]

次の２例のように、強音/t//q/が語末にきて、母音で始まる単語が結合し合成語となると気音はなく、無声無気音として実現する。下線は吉池による。

「事件」[bai<u>t‘</u>]　　＞「大丈夫」[bai<u>t</u>-aqw‘]の[t]

「はだか」[fia<u>qw‘</u>]　　＞「はだかになる」[fia<u>qw</u>-om]の[qw]

以上によると、強音の音声は、通常は無声の有気音であるが、位置によっては無声の無気音としても実現する。

弱音は閉鎖と呼気が弱く、そのため破裂の騒音が弱いことを特徴とする。語頭や語末、および無声音の前で半有声音となる。弱音/b//d/を含む単語の音声表記は次のとおり。

「場所」[b̥a˙]（下の丸は半有声音であることを表す）

「峰」[xad̥]

「丁度」[t‘ob̥sɜm]

次のように、母音（有声音）に挟まれると、半有声音ではなく完全な有声音となる。たとえば、[vadən]の[d]は母音[a]と[ə]の間で有声音[d]となる。

「ポケット」[vadən]

以上によると、弱音の音声は、通常は半有声の無気音であるが、位置によっては完全な有声の無気音としても実現する。

上記の実例をみると、破裂音と破擦音における二項の対立を、有気音と無気音、もしくは

無声音と有声音と、割り切ってしまうことはできない。強音（tense）と弱音（lax）の対立とした所以であろう。

しかしこのような強音（tense）と弱音（lax）の区別が、実際に言語活動を行う話し手と聞き手にとって有効であるか疑問である。なお、ここで言う強音（tense）と弱音（lax）は、いわゆる硬音（fortis）と軟音（lenis）と同義である。

8. 強音（tense）と弱音（lax）

『明解言語学辞典』によると[⑨]、音声器官の筋肉の緊張の度合いが強い音をテンス、弱い音をラックスとし、子音についてはフォルティス（fortis 硬音）・レーニス（lenis 軟音）を用いるのが伝統的とする。いずれにしても、音韻的な区別を一つの音声特徴に絞り込めないばあいに使われるようであり、音声的な実体は特定しにくいとのことである。

そもそも、音声的な実体を特定しにくいような筋肉の緊張と弛緩を頼りに、人の耳が、相手の発音を容易に聞き分けることができるのかという問題がある。無声音かそれとも有声音か、有気音かそれとも無気音か、場合によっては二つの特徴を兼ね備えた無声有気音かそれとも有声無気音か、というような明瞭な基準に照らし合わせて区別するほうが容易である。人の言語活動という面から言うならば、発音と聞き取りの“容易さと明瞭さ”を捨てて、“容易さと明瞭さ”において劣る強音（tense）と弱音（lax）を取ることに道理はない。

発音において、強音（tense）と弱音（lax）という筋肉の緊張の強弱があること自体を否定するつもりはないが、それは話し手と聞き手が音を区別するにあたっての決定的な音質ではなく、音の区別において、余分（余剰）[⑩]なものとみてよい。

9. 音韻観の相違

以上の「人の言語活動という面から言うならば、発音と聞き取りの“容易さと明瞭さ”を捨てて、“容易さと明瞭さ”において劣る強音（tense）と弱音（lax）を取ることに道理はない」とする観点から服部四郎・山本謙吾(1956)をみるならば、破裂音と破擦音における二項の対立を強音（tense）と弱音（lax）ではなく、有気と無気の二項の対立とみても特段の不都合はない。無気音の系統の子音が、[b̥aˈ][xad̥] [tʻob̥sɜm]のように半有声音で現れるの

---

⑨ 斎藤純男・田口善久・西村義樹編(2015)。「音声器官の筋肉の緊張の度合いが強い音をテンス（緊張）、弱い音をラックス（弛緩）という。これを母音について使い、子音についてはフォルティス（fortis 硬音）・レーニス（lenis 軟音）を用いるのが伝統的だが、どちらにもテンス・ラックスを使うこともある。音声学的な実体を厳密に特定しにくく、また、そうせずに曖昧に使われることも多く、問題のある用語ではあるが、音韻的に区別される音のカテゴリーを特定の１つの音声的特徴で区別できない場合などによく使われる。たとえば【以下省略】・・・」（162 頁）。

⑩ 斎藤純男(2010)を引用する。「ある言語において実際に現れる音声的特徴の中には意味の区別に関与的なものとそうでないものとがある。前者を弁別的特徴(distinctive feature)、後者を余剰的特徴（redundant feature）という。」38 頁。

は、気音の有無の対立を明瞭にするため、無気音を調音する際に筋肉の緊張を緩めて出気を抑えるという調音上の運動に付随するものであり、母音に挟まれたときに[vadən]のように完全な有声音となるのは、緩い閉鎖の半有声子音が母音の影響を受けて完全な有声音となったものである。有気音に相当する語末の強音（tense）[bait‘]が、[bait-aqw‘]のように気音が抑えられるのは、母音と結合することによって筋肉の緊張が弛緩し、気音が抑えられのである。そうであるならば、音韻としても、有気音と無気音の対立として良かったはずであり、あるいは無声音と有声音の対立とする余地もあったはずであるが、そうはしなかったのはなぜか。

思うに、服部四郎・山本謙吾(1956)と、清格爾泰(1982)の音韻に対する考え方の違いによるものであろう。服部四郎・山本謙吾氏は、音声の補い合う分布を合理的に説明し得るものを音韻として提示するのであって、話し手と聞き手がどのように音を区別するかという事については考慮の外に置く。清格爾泰氏は、対立する音の一方は“明らか”な有気音であり、他方は無気音であることが“明らか”な半有声音であるため、話し手と聞き手は息の有無によって区別しているに相違ない、と判断したのであろう。服部四郎・山本謙吾氏は音声の補い合う分布に対する合理的な解釈に重きを置き、清格爾泰氏は人の言語活動の実際に重きを置いているようにみえる。

10. 地域特徴[11]

気音の有無による音の区別が、強音（tense）と弱音（lax）という音質を伴なうのは、先に見た満洲語だけでなく、東部地域に位置するモンゴル語にもみられる。

服部四郎(1951)は二つの資料を利用してモンゴル語のチャハル方言の音韻を論じたものである。二つの資料とは、1950 年 9 月 1 日に Austin 氏から渡された同氏の著書 *Spoken Mongol* の謄写版刷り原稿、および Trjesen 氏の論文‘Mongol Phonemic Romanization’（1950 年 11 月執筆）である。この二資料と、服部氏の観察（1950 年 9 月 1 日に行われたチャハル方言の話者に対する観察。このチャハル方言の話者は、Austin 氏の著書の話者と同一人物）とを比較しつつ論を進める。なお、服部氏は、Austin 氏と Trjesen 氏の資料を引用するわけであるが、Austin 氏は音韻記号のみ記して音声記号は記さない。その音韻記号に対して、服部氏は音声記号を補記する。この点について、服部氏論文の注（6）において「A 氏の音韻記号の次に示した音声記号は、氏の記述に従って、私が国際音声字母を以て該当の単音を示したものであり、T 氏の欄に見える音声記号は T 氏自身の示すものである。」(367-368 頁。下線は吉池による）とある。「氏の記述に従って」の意味するところが、Austin 氏よってなされた音声についての説明に従って服部氏が音声記号を補記したということなのか、Austin 氏の単語の音韻表記に従って服部氏自身の観察として音声記号を補記した、という

[11] 斎藤純男(2010)を引用する。「隣接する言語どうしが相互に影響して類似してくるという現象があり、それを言語連合という。そこに見られる共通の特徴を地域特徴(areal features)と呼ぶ。」213 頁。

ことなのか明瞭でないため、補記された音声記号が、Austin 氏の考えを反映したものか、服部氏自身の観察を記したものなのかわからない（両者のインフォーマントは同一人物）。そこで Austin 氏（服部氏）として資料を提示することにする。以下に用例をまとめて、その概略を示す。

	Austin 氏（服部氏）	Trjesen 氏
/b//d//g//j/		
語頭の/b/	/b/［b̥］	/b/［p］
母音間の/b/	/b/［ß］	…用例無し…
語末の/b/	…用例無し…	/b/［~~b~~］
語頭の/d/	/d/［d̥］	/d/［t］
語末の/d/	/d/［d̥］	/d/［t］
語頭の/g/	/g/［g̊］	/g/［k］
母音間の/g/	/g/［γ］	/g/［~~g~~］
語末の/g/	/g/［γ］	/g/［k^x］
語頭の/j/	/j/［d̥ʒ］	/j/［dž］
語末の/j/	/j/［d̥ʒ］	/j/［dž］
/p//t//k//c/		
語頭の/p/	/p/［p‘］	/p/［p^h］
語頭の/t/	/t/［t‘］	/t/［t^h］
母音間の/t/	/t/［t‘］	…用例無し…
語末の/t/	…用例無し…	/t/［t^h］
語頭の/k/	/k/［k‘］	/k/［k^h］
語中 r の後 a の前	/k/［k‘］	…用例無し…
語頭の/c/	/c/［tʃ］	/c/［tš］
母音間の/c/	/c/［tʃ］	…用例無し…
語末の/c/	…用例無し…	/c/［tš］

語頭の/b//d//g//j/と/p//t//k//c/をみる。Austin 氏(服部氏)は/b//d//g//j/を半有声音の[b̥][d̥][g̊][d̥ʒ]とし、/p//t//k/を無声有気音の[p‘][t‘][k‘]とし/c/を無声無気音の

[tʃ]とする。/p//t//k//c/において破裂音/p//t//k/と破擦音/c/の扱いが異なる。Trjesen氏は/b//d//g/を無声無気音の[p][t][k]とし/j/を有声音の[dž]とし、/p//t//k/を無声有気音の[pʰ][tʰ][kʰ]とし/c/を無声無気音の[tš]とする。破裂音は気音の有無の対立となっており、破擦音は声の有無の対立となっている。両者ともに破裂音と破擦音の扱いが異なる。調査者の聴覚に頼った記述には個人差が出るため、そのような資料によって、微妙な音声の差異について論じるのは慎重であらねばならないが、破裂音と破擦音の扱いが異なるということについては信頼して良いのであろう。これをどのように考えるか難しいところであるが二つの解釈が可能である。一つは、/b//d//g//j/と/p//t//k//c/の対立を弱音（lax）と強音（tense）に求める。これによると破裂音と破擦音を統一して解釈することができる。他の一つは、破裂音と破擦音を分けて考える。破裂音は気音の有無により区別され、摩擦成分を含む破擦音及び摩擦音（[s]と[z]など）は声の有無により区別されるとする。服部氏は/b//d//g//j/と/p//t//k//c/がどのような二項の対立によって区別されるのか述べておらず、この論文が持つ問題点であると思う。

いずれにしても、服部四郎(1951)はチャハル方言の子音音素について「同じ子音音素に該当する単音も、母音に先立たれない場合と母音間にある場合などとで、かなり異なることがある。たとえば、/b/に該当する単音は、初頭の位置では半有声の[b]、[m]の後且つ母音の前では有声の[b]、母音間では[ß]であるのが普通である。従って、これらが同一の音素/b/に該当することを証明するのには多少長い手続きを要するが、両氏【Austin 氏と Trjesen 氏：吉池補注】の結論が正しいと認められる点に関しては、今回はこの種の証明を省略することとする。」(333 頁）と述べていること、およびAustin氏(服部氏)が[b̥][d̥][g̊][d̥ʒ]という音声表記を用いることより、チャハル方言の破裂音と破擦音に半有声音、すなわち弱音（lax）という音質を認めていることは確認できる。

上でモンゴル語チャハル方言を見たが、北方の漢語も同様の特徴を持つ言語に加えてよいと考える。下にその要点を記す。

漢語方言の一つである上海語の声母には、たとえば[tʻ]と[t]と[d]（[d]は語頭と語中で音質が異なるが詳細は述べない）など 3 種の区別がある。他方、北京語には[tʻ]と[t]など 2 種の区別しかない。両者の音質を比べると、上海語の無声有気音[tʻ]などは北京語の無声有気音[tʻ]などとそれほど違いはないが、上海語の無声無気音[t]などは北京語の無声無気音[t]などと音質が違う。上海語の [t]はキッパリとした印象の音（閉鎖と破裂が強い）で、北京語の [t]はやんわりとした印象の音（閉鎖と破裂が弱い）である。このためであろうか、北京語の語末・文末の助詞の“的”（軽声で発音される）は、日本語の濁音ほど明瞭なものではないが[dɐ]のように有声音に聞こえる。北京語と上海語が、強音（tense）と弱音（lax）によって区別されると認識されているわけではないが、敢えて強音（tense）と弱音（lax）を当てはめるならば次のように分けることができる。

	強音（tense）	弱音（lax）
北京語：	[tʻ]	[t]～[d̥]

上海語：　　[t‘]と[t]　　[d]

以上は吉池の観察による記述であるが、林燾・王理嘉（1992）の北京語の観察には次のようにある。

「普通話【北京語：吉池補注】の破裂音【ピンインのｂやｄやｇで表記される所謂無声無気音を指す：吉池補注】は全て無声音であるが、発音時に筋肉は十分に緊張しておらず、気流も十分に強くはない。聞いてみると、漢語方言の蘇州語や広州語の無声破裂音のように硬くて澄んではいない。筋肉の緊張の程度や気流の強弱からみて、有声破裂音に近い。ただ声帯の振動がなく、厳密に言えば、[b̥][d̥][g̊]などを用いて描写しなければならない。普通話の無声破擦音にも同様の傾向がある。」[⑫]

漢語普通話（北京語）の無声無気音[p][t][k]の閉鎖と破裂は弱く、厳密には[b̥][d̥][g̊]等のようであるとするから、弱音（lax）に近い音質を持っているとみて良いのであろう。

以上、満洲語口語、モンゴル語チャハル方言、北京語の弱音（lax）に関わる文献の記述をみたが、弱音（lax）に伴う有声の程度は言語や方言によってさまざまであろう。このような微妙な判断が要求されるものについては、調査者の聴覚に頼った記述のみではなく、音響音声学の手法を利用する必要があることは論を待たない。

11. 有気音と弱音（lax）

満洲語、東部地域に位置するモンゴル語、北方の漢語にみられる地域特徴、すなわち気音の有無による音の区別が強音（tense）と弱音（lax）という音質を伴なうという特徴の成立には、“有気”という音質が関わっているとみる。そのことについて考えを述べる。

強音（tense）と弱音（lax）という音質は、一方の無気音が比較的強めの気音を帯びることによって誘発されると考える。どういう事かというと、①一方が気音を帯びることにより、気音の有無による対立ができる。②次いで、気音の有無の対立を、より明瞭にするため、他方の無気音を調音する際に、筋肉の緊張を緩めて、緩い閉鎖をつくり、その直後の破裂を弱くすることにより出気を抑える。結果として、③有気音と無気音という二項の対立を持つ破裂音と破擦音は、強音（tense）と弱音（lax）という音質を帯びることになる。

仮に、或る言語の破裂音と破擦音の一方が無声有気音で、他方が有声無気音であったばあい、後者の有声無気音は気音を抑えるために緩い閉鎖をつくり、その直後の破裂を弱くするため、有声性が弱まり半有声音となる。仮に、或る言語の破裂音と破擦音の一方が無声有気音で、他方が無声無気音であったばあい、後者の無声無気音は気音を抑えるために緩い閉鎖をつくり、その直後の破裂を弱くするため、前後の母音や有声子音の影響で声帯の振動を伴ない易くなり半有声となる。

---

⑫「普通話的塞音雖然都是清音，但發音時肌肉並不十分緊張，氣流也不十分強，聽起來不像漢語其他一些方言如蘇州話或廣州話的清塞音那樣硬而脆，從肌肉的緊張程度和氣流的強弱看，更接近於濁塞音，只是聲帶没有顫動，厳格地講，應該用[b̥][d̥][g̊]等等來描寫。普通話的清塞擦音同樣也有這種傾向。」78 頁。

いずれにしても、一方の無気音が比較的強めの気音を帯び強音（tense）となることを契機として、他方の音において弱音（lax）という音質が誘発されるわけである。

12. 結語

現代満洲語口語の破裂音と破擦音には、音質において閉鎖と破裂の強い強音（tense）と閉鎖と破裂が弱い弱音（lax）があり、有声性を伴なうが、話し手と聞き手は、有気音と無気音によって音の区別をする。この有気音と無気音の区別を、音韻上の区別と見ることができる。このような見方、すなわち現代満洲語口語の破裂音と破擦音における二項の対立は気音の有無によるという見方は、中国の研究者の見方（②清格爾泰(1982)、③趙傑(1989)、④愛新覚羅烏拉熙春(1992)）を追認するものである。なお、この議論に関連して、満洲語破裂音と破擦音の二項の対立について以下の三つの考えを提示した。

一、服部四郎・山本謙吾氏は強音（tense）と弱音（lax）の区別とみる。清格爾泰(1982)は有気音と無気音の区別とみる。その違いは音韻観の違いに起因するものである。すなわち、音韻の設定にあたって、服部四郎・山本謙吾氏は音声の補い合う分布に対する合理的な解釈に重きを置き、清格爾泰氏は人の言語活動の実際に重きを置く。

二、気音の有無による音の区別が、強音（tense）と弱音（lax）という音質を伴なうという特徴は、地域特徴として満洲語、東部のモンゴル語、北方の漢語にみられる。

三、地域特徴の成立に有気音が依っている。話し手は、気音の有無の対立を明瞭にするため、無声有気音（強音）と対立する無気音を調音する際に筋肉の緊張を緩め柔らかな閉鎖をつくり直後の破裂を弱めて出気を抑えるという調音上の操作をする。ことにより弱音（lax）ができる。

参考文献（発行年順）

服部四郎(1951)「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』第 19・20 号。『服部四郎論文集２ アルタイ諸言語の研究Ⅱ』319-372 頁、東京：三省堂、1987 年。

服部四郎・山本謙吾(1956)「満州語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30：1-29。『服部四郎論文集 3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』(1-55，東京：三省堂，1989 年）所載による。

清格爾泰(1963)「蒙古語語音系統」『内蒙古大学学報』。『清格爾泰文集２』663-728 頁、内蒙古出版集団・内蒙古科学技術出版社、2010 年所収（蒙古文の漢語訳）による。

清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学報（哲学社会科学版)』。(1998)『清格爾泰民族研究文集』232-355，北京：民族出版社。

服部四郎(1984)『音声学』東京：岩波書店。1987 年の第 3 刷による。

趙　傑(1989)『現代満語研究』北京：民族出版社。

愛新覚羅 烏拉熙春(1992)『満洲語語音研究』京都：玄文社。

林　燾・王理嘉（1992)『語音學教程』北京：北京大学出版社（第 3 次印刷 1997 年）

斎藤純男(2010)『言語学入門』東京：三省堂。
斎藤純男・田口善久・西村義樹編(2015)『明解言語学辞典』東京：三省堂。
吉池孝一(2018)「女真文字談義（5）―現代満州語口語の二項対立子音、アルタイ諸語の s の音質など―」『KOTONOHA』第 185 号(2018 年 4 月)、1-10 頁。